放課後の実験―サンプル―

窓の外は漆黒の闇。でも時計を見ると、まだ十七時を回ったところだった。柊（ひいらぎ）誠（まこと）が雑巾を絞っていると、背後から声をかけられた。

「柊、もう帰れ」

化学教師の名内（なうち）が洗ったばかりのビーカーを水切りかごに置いた。続いてもう一つ、今度は試験管を丁寧に洗い始める。声をかけてきておきながら、その視線は下に向いたままだ。

「……先生」

呼びかけるだけで、心臓が脈を速めた。声が掠れていたので、水を使っている先生には届かなかったかも、と不安になる。

「どうした？」

キュッという音がして水が止まると、化学室の中はしんと静まり返った。今日は部活なしの日なので、生徒はもう、みんな帰路についたはずだ。

「――あと少しで授業終わりですね」

高三の冬。みんな受験勉強一直線で、気を遣って授業時間を自習にしてくれる先生もいる。けれど名内先生は今日も、「シャーペンばかり握っていると肩がこるから」と言って、本当は実験なんて生徒が怪我をしないかだとか器具の準備や片付けだとか、大変なことも多いのに実験をさせてくれていた。

「そうだな。青春の三年間なんてあっという間だ」

本当にあっという間だった。入学式で先生に一目惚れをして、苦手だった理科を一生懸命勉強した。授業中、チョークを持つ先生の手に浮いた血管にドキドキして、実験器具の片付けの手伝いを買って出て。

だって、先生と少しでも長く一緒にいたかったから。

「お前、チャリ通だっけ？」

「今日は歩きです」

「雨じゃないのに？」

「最後の授業が化学だったから……」

今度の呟きは、先生の耳には届かなかった。

「え？」先生がこちらに耳を向けた。

「――たまに、のんびり歩いて帰りたい日もあるんです」

「繊細な受験生だもんな」

「――ええ。悩める受験生ってやつです」

本当は先生が遅いから送るよと言ってくれるんじゃないかと、そんなことあるわけないとわかりながら、心のどこかで期待していた。

「けどもう遅いよ。最近は男子高校生だって狙われるらしいから」
柊個人ではなく生徒への言葉なのが残念だったけれど、たとえ生徒としてでも心配してもらえたことは嬉しい。
「僕は大丈夫ですよ」
「何言ってんだ。お前がめちゃくちゃモテてるって噂は俺の耳にも届いてるぞ」
「え、そんなことないですよ」
柊の言葉も聞かず、先生が指を折った。
「今週は三人」
「え……」
「先週は二人。このペースだと卒業までの間に全校生徒に告白されるんじゃないか」
どうして先生がそんなことを知っているんだろう。同級生にさえ話していないのに。
「みんなふったらしいな。好きな人でもいるのか」
好奇心――そこに少しの嫉妬も含まれていないことが手に取るようにわかり、胸が痛んだ。
(……本当はわかってるくせに)
だってこれまで、少しでも先生の近くにいようとしてきた。それともただの化学好きだと思われているのだろうか。
「先生」
「うん？」
先生がもう一度水を出した。二本目の試験管を洗っている。楽しそうな様子から、本当に実験が好きなんだなぁと、先生の好みを知れて嬉しい反面、こちらにすべての意識を向けてもらえないことが悔しくなる。
「先生」
自分でもずるいと思う。まるでただ呼びかけているだけのように発して、好きな相手は先生だと含みを持たせている。
「――柊」
水道が止まった。また空気がしんと静まり返る。返事をしなきゃと思うのに、喉が張り付いたように動かない。
「――帰り道、危ないぞ」
やはり、柊の意図には気付いてもらえなかった。いや、気付かないふりをされたのか。そのどちらなのかもわからないことが苦しくて、けれどそんなふうに逃げたのは自分だという自覚もあって。
だって、好きな人は先生ですと言う勇気はなかったから。
「……知ってます。帰り道にある公園で先週、変質者が出たって」
その事件の被害者は仕事帰りのＯＬだった。二十代半ばで、残業帰りの遅い時間。そもそも性別が違うのだから、柊はどう考えても対象外だろう。けれどもう少し心配してほしくて、そこまでのことは言わずにおく。
「そこを通るのか」

「通らないで帰ることもできますけど……でもそうすると十五分ぐらい遠回りになるんです」
先生がゆっくりとこちらに歩いてきた。あと一メートルというところで足を止め、じっと柊を見つめる。
（ぁ……）
挑発的な態度をとったのは自分なのに、先生の視線の強さに負けてつい目をそらしてしまった。
「柊」
「は、はい……」
机の黒い天板に、「合格しますように」とシャーペンで書かれた落書きが光って見えた。
「恋人は」
「いません」
ゆっくりと視線を戻し、正面の先生を見上げる。真剣な顔にドキリとした。
「好きな人は」
「……います」
「この学校の生徒？」
「……違います」
いったいどうしたのだろう。ようやく、柊の気持ちに向き合ってくれる気になったのだろうか。
「じゃあ他校の？」
「違います」
「この学校の人」
「っ……はい」
生徒ではないともう告げた。それなら残るのは――。
「教師？」
声が出なかった。俯き、思考を巡らせる。「はい」と言えばどうなるのだろう。ドクンドクンと脈がうるさくて集中できない。
「送るよ」
「え……？」
「荷物を持ってついておいで」
化学室の鍵を持った先生がドアに向かった。それで、柊の好きな人が誰なのか、確信を持つ前に話を切り上げられたのだと気付く。
（……ずるい）
卒業前に、どうしても気持ちにけりをつけたかったのに。でもふられるのが怖くて曖昧な言い方をした自分もずるい。せっかく先生が歩み寄ってくれたのに、それに答えることもできなかった。
「……先生」
先生が足を止め振り返った。視線はぶつかっているのに何も言われない。

「先生」もう一度呼ぶと、今度は返事があった。
「どうした」
「――――一人で帰れます」
だってこんな状態で送ってもらっても、苦しくなるだけだ。元々見込みがあるなんて思ってはいなかったけれど、それでも現実を突きつけられれば苦しくなる。
「変質者が出るんだろう」
「大丈夫ですよ。変質者だって相手を選びます」
それでもまだ、被害者が女性だったと言うことはできなかった。もうふられたも同然だとわかっているのに、なんとかチャンスがないだろうかとすがりたくなってしまう。
（諦めが悪いな……）
昨日の夜は、今日の放課後に告白するつもりでいた。でも先生の態度を見ていたらそんなことを考えていた自分がバカバカしく思えた。それでも好きの言葉を言わずに逃げ道を残したまま、どうかこの気持ちを知ってほしいなんて欲を出した。
――でももう、それも失敗に終わってしまったとわかっているのに。
鞄を掴み、先生の隣を足早に通り抜ける。しかしそのとき、
「柊、」
がしっと手首を掴まれた。
「先生……？」
目が合った。思いの外近くてドキドキする。それになんだかまるで飢えた肉食獣みたいな目をしている。その目に捕らわれたみたいで、動けない。
「……先生」
返事はなかった。無言のまま、ゆっくりと顔が近づいてくる。
（あ……）
あと三十センチ、二十センチ……キスだ。目を閉じると唇に柔らかいものが触れた。けれどすぐ音もなく離れて――。
「気をつけて帰れよ」
先生はくるりと踵を返し、教卓横の水道に戻った。まだ洗っていない残りの実験器具を水ですすいでいく。
キスの意味も、その感情も教えてくれないまま――。

＊　＊　＊

大学三年、五月――。
「おかえり、柊くん」
「これから二週間、お世話になります」
教頭先生の紹介で、職員室にいた先生たちが優しい拍手で迎えてくれた。久しぶりの母校、もしかしたらもう異動していないかもしれないと思っていた名内先生は、職員室の一番窓際、

端っこの席に座っていた。
卒業式からまだ二年と少ししか経っていないのに、もう何十年も顔を見ていなかったような気分になる。
「じゃあ柊くん、細かいことは名内先生に教えてもらって」
「はい」
「これからよろしくお願いします」
おかえり、がんばって、という声に頭を下げながら、ゆっくりと先生の机に向かう。
近づくにつれ、足が震えた。大好きな、ずっと会いたかった先生がすぐそこにいる。
先月の初め、ここへは一度打ち合わせを兼ねて挨拶にきた。そのときに名内先生が指導担当になると聞いたけれど、当の本人は何か用事があったとかで、会うことはできなかったのだ。
口の中がやけに乾いている。鼓動が速くなり、吐き気がし始める。
やはり、来ない方がよかったのかもしれない。だって、打ち合わせに指導担当がいないなんて今考えてみればありえないことだ。もしかしたらあれは、来るなという先生からのメッセージだったのかもしれない。なのに柊はのこのことやってきてしまった。先生の思いを汲むどころか、異動になってなくて嬉しいなんて。
しかし今さら「やっぱりやめます」なんて踵を返すことはできない。先生の向かいの席に座った数学担当の神谷が柊を見て「おかえり」と言った。それにも曖昧な笑みを返すことしかできない。
「よう」
「ぁ……」
先生は何も変わっていなかった。少しぼさっとしたように見えるくせっ毛に黒ぶちのメガネ。真っ白できちんとアイロンのあてられた白衣。指に、光るものはない。
「――ご、ご無沙汰しています」
「元気そうだな」
先生の顔に、ほほ笑みが浮かんでいた。どうやら拒絶されていたわけではないらしい――しかしそれは単にここが職員室だからというだけかもしれない。
「はい。先生もお元気そうで」
つい、先生の唇を見てしまった。
あの日の先生からのキス。けれどそれっきりだった。好きだと言われるわけでも、連絡先を交換するでもなく――そして実験はあの日を最後に行われなくなり、柊が先生のそばに行く理由もなくなった。そのまま卒業式を迎え、地元を出て下宿先から大学に通うようになった。
「今日の最初の授業は二限だ。おいで、授業の説明をするから」
「はい」
先生の後ろをついて階段を上がる。どうやら向かう先は化学室らしい。校舎の匂いに、懐かしい記憶がよみがえる。

「……変わってませんね」
緊張で、しゃべっていないといられなかった。「あ、この落書きもまだ残ってる……」
思わず足が止まった。
「ああ。それお前が書いたのか？」
階段の踊り場に書かれた「大好き」の文字。まさかそんなこと、柊がするはずがないのに。
「違いますよ」
「なんだ、違うのか」
意味深に聞こえるのは、先生のことを意識しているからだろうか。
「校内の造り、覚えてるよな？」
「覚えてますよ」
母校の受け入れが厳しいとき、教育実習生は知らない学校へ行くことがあるという。そうなったら先生の名前どころかトイレの場所からすべて覚えないといけないのだから、とても大変だろうなと思う。
「手間が省けて助かるよ」
「手間……」
「ああ、悪い。でも別にお前の相手を手間って思ってるわけじゃないから」
「いや、教育実習って大変って聞きますから。すみません、お忙しいのに」
卑屈になっているわけではなかった。ただ事実として、好きな人である以前に恩師である先生に迷惑をかけるのが申し訳ないと思っていただけだ。
「いや……それ、たぶん大変なのはお前だよ。俺が教育実習に行ったときはしばらく寝る時間も取れなかった」
「え……そんなにですか」
当然、やるべきことは事前に聞いているので把握している。けれどまさか、そこまで忙しいなんて。
先生への感情云々なんて考えている暇はないかもしれない……と無意識のうちに視線が泳いだ。先生が柊を見て、くすりと笑う。
「大丈夫だ。懇切丁寧教えてやるから」
頭にぽんと手を置かれた。先生が触れてくれた。そう思ったらほっとして、かすかに膝が震えた。
「ほら、入れ」
鍵が開けられ、引き戸を開けて化学室に入る。胸を満たす独特な香り。室内を見回すとあの日の記憶が鮮明によみがえり、泣きたいような気分になった。そんな気持ちを悟られぬよう、唇を噛む。
「――変わりませんね」
「そうだな。備品のうちいくつかは生徒に割られて新しいものに変わったけど」
先生が可笑しそうに笑った。まるで印象が昔と変わっている。先生はそうやって笑う人じゃなかった。もしかしてこの二年のうちに恋人ができたり、結婚したり……そんなことがあ

ったのだろうか。もう一度目を走らせても、指輪ははまっていないけれど。
「先生」
「ん？」
「――二限目は実験ですか」
本当は何があったのか――プライベートで何か変化があったのかを訊きたかった。けれど訊けなかった。
「そうだよ。受験生に息抜きの時間をやらないと」
またニッと笑われる。
「僕たちのときもそう言ってましたけど、本当は先生が実験好きなだけじゃないんですか」
先生の様子は、まるであのときのキスを忘れているみたいだった。そう思ったらあの日から毎日思い出していた自分がバカみたいで――。
自分の心をごまかす柊の軽口に、先生がまた可笑しそうに笑った。
「バレたか。けど生徒たちには言うなよ」
唇に当てられた人差し指。その唇にキスをされたことを、どうしたって忘れることができない。
「――言いませんよ。ああ、でも先生にいじわるされたら言っちゃうかも」
「いじわる？　これほど優しい先生なんていないだろ」
「……そうですね」
ぶっきらぼうな声になった。だって優しくなんてない。先生はキスの理由を教えてくれなかった。気まぐれでも出来心でも、なんでもいいから理由を言ってくれたらこんなに長いこと切ない思いを抱え続けなくて済んだかもしれないのに。
「じゃあまず授業準備の流れから教えようか」
卒業前に座っていた席に腰を下ろすと、先生がわずかに目を細めたのがわかった。
「お前、そこに座ってたよな」
「覚えてたんですか」
「記憶力だけはいいんだよ」
じゃああのときのキスも覚えているんですか――頭の中に浮かんだセリフをぐっと飲み込み、笑顔を作る。
「記憶力だけなんですか？　さっきは性格もいいって言ってましたけど」
「言葉の綾だろ。俺は顔もいい」
「悪いのは――」
「収入くらいかな」
本当に、いったい何があったのだろう。いったい何が先生をこんなに明るい人にしたのだろう。それとも単に、生徒と生徒じゃない相手への区別なのだろうか。
「……それ、言っちゃっていいんですか」
「え？」
「教育実習に来てるのに。そんなこと聞いたら先生になろうと思わなくなるかも」

わざと恨みがましい目をして言ってみると、先生はあからさまに驚いた表情になった。
「え、お前教師になりたいのか」
「え？」
まさかそんなことを思われているとは思わなかった。同級生の中にはつぶしが利くからと言って取っているだけの人もいるけれど、保険のために取るにはあまり率がいいとは言えないだろう。教育学部ではないから本来の講義以外に教職科目も取らないといけないし、当然こうして教育実習もある。柊が知る限りこれまでに三人、挫折して取るのをやめていた。
「……いや、とりあえず教職取っとこうっていうアレじゃないのか」
取ってつけたような言い方だった。さすがにまずいと思ったのだろうか。
「そんなことないですよ。先生みたいな教師になりたいなって」
自分でも棒読みだなと思った。それでも負けじと目を見つめていると、先生も表情から笑みを消した。
「俺みたいな真面目な教師？」
言葉の直後に浮かべられた作り笑い。本当はそれに乗っかるべきなのだろう。
でも――。
「真面目な教師は――」
先生の視線が心に刺さった。それ以上言うなと目が訴えかけている。ドクンドクンと心臓が爆音をたてる。
「――自分の趣味を受験生に付き合わせないんじゃないですか」
言い終えたあとでにこりと笑うと、先生は安堵したように表情を緩めた。
「だからそれは――」
「気分転換させるため、ですよね」
柊が笑うと先生も笑った。それは明らかに安堵の顔つきだった。

〜〜〜〜

「キス、しなきゃよかったな」
「っ……」
――そう思われているだろうとは思っていた。でも本人に言葉で告げられると胸が痛む。痛すぎて、右手でシャツの胸元を握る。
「柊、」先生が腰を上げた。
ゆっくり一歩ずつ、まるであのときのように先生が近づいてくる。
「今頃お前は誰かと幸せになってると思ってた」
「……二年間、毎日先生のことを考えていました」
失恋したとわかっていても、それでもずっと好きだったということだけは知っていてほしかった。
「後悔するよ」

「え……？」
「俺がどういうタイプの人間か、気付いてるだろう？」
「あ……」
獰猛な目つき。あの日と同じ飢えた肉食獣の目。
「一度捕まえたら俺は離さない」
「……じゃあ恋人がいっぱいいるんですか」
「恋人がいたことはないよ」
「え……？」
「誰だって好きな人を壊したくはないだろう」
「あ……」
先生の言いたいことは、瞬時に理解できた。だって柊自身もそれを求めていたから。
「壊れて……でもそいつが壊れていくことに、誰も気付かない」
「え……？」
先生らしくない、曖昧な言葉だった。理解できずに首を傾げると、「外に出なければ誰にも気付かれないだろう？」と目を細めて告げられた。
「あ……あ、え……？」
混乱した。先生が嗜虐趣味であるだろうことは想像していたし、そういうところを好きになった。それに、いじめられるところを想像しながら何度も抜いたけれど……。
（誰にも気付かれないって……もしかして監禁、とか……？）
「――忘れてくれ」
あのときと同じように先生がくるりと踵を返した。「鍵は教卓の上にある」
今回は自分で閉めてこいということだろう。
「先生」
背中に呼びかけると歩みが止まった。けれど振り返ってはもらえない。
「好きな人、壊しちゃいけないんですか」
先生がゆっくりと振り返った。怖いほどの真剣な視線とぶつかる。でも何も言われなかったので思いを口にした。
「好きな人に壊されたいと思っちゃいけないんですか」
「柊……」
「誰にも気付かれなくても、先生はちゃんと見ていてくれるんでしょう？」
先生が言っていることと柊の頭の中にあるものが合致しているかはわからない。けれど少なくとも、先生に壊されたいと思っていることは伝えたかった。もし意味が違っていたとしたら、それはそのときちゃんと話せばいい。今このまま先生を行かせてしまったら、その機会さえ失ってしまう。
「先生はちゃんと、壊れていく過程も、壊れたことも認識して受け入れてくれるんでしょう？」
「柊、」
「どうしてですか？　壊したいなら壊せばいいじゃないですか。好きな人に壊されたいと思

う人だっているんですから」
一方的な考えで、柊の気持ちまで否定しないでほしかった。それにチャンスがあるなら食らいついていたくて。
あの日、曖昧な言葉と態度をとってしまったことを、ずっと後悔してきたのだ。
「……お前、自分が何言ってるかわかってんのか」
「わかってますよ。入学のときからずっと先生のことだけ考えてきたんですから」
思いを伝えることに夢中になりすぎて、告白というより喧嘩を売っているみたいだった。でも先生にはしおらしい告白よりこちらの方が気持ちが伝わるような気がした。
「ボロボロになるぞ」
「だからそうしてほしいって言ってるじゃないですか」
つい熱くなってしまった。でも後悔はない。だってこれが最後のチャンスなのだ。あのときは生徒だからというしがらみがあったけれど、今はもうそれもない。
先生が足早にこちらに近づいてきた。あっという間に目の前に来て、腕を掴まれ唇を塞がれた。
「ンッ！」
息苦しい。あのときとはまるで正反対の、食らいつくような口づけだった。
「んんっ……」
強く吸われ、唇が痛い。でもその痛みが、相手が先生なのだと認識させる。
「んっ……ん、は……」
「逃げるなら今が最後のチャンスだぞ」
目と言葉が矛盾していた。ここに縛り付けるような、縫い付けるような目をしているくせに。
「逃げません。逃げないけど……先生に縛られたい」
もう一度顔が近づいてきて、今度は何度も唇を噛まれた。ガリッと音がしそうなほどの、獣みたいなキス。
「……ン……」
「柊」
「……はい」
唇を動かすと、ジンジンと痛んだ。熱くて、まるでそこに心臓があるみたい。
「……先生？」
なぜか呼ばれただけだった。ちゃんと目を見て返事をしたのに、先生は窓に向かって歩いて行く。
「先生、」
シャッという音を立ててカーテンが引かれた。遮光カーテンもあるのに、なぜか薄い白い方。だから室内は、五月の強い日差しが明かりを満たしたままになる。それから、ドアの鍵がかけられた。
「脱ぎなさい」

「え……」
戸惑っていても、先生は同じ言葉を繰り返さなかった。ただじっと見つめられ、試されていると悟る。
「……はい」
ジャケットを脱ぎ、ネクタイとベルトを抜く。シャツのボタンを外し、靴と靴下を脱いでから一枚一枚服を床に落としていく。
二メートル先から、強い視線が肌を貫いている。
（恥ずかしい……）
それでも手を止めるわけにはいかなかった。それに、先生に命じられて脱ぐ、というのはこれまで何度も想像してきたこと。シャツの下に着ていたインナーを脱ぎ捨て下着を下ろす。先生に見られていると思うだけで、緊張しているにもかかわらずペニスはわずかに反応を始めていた。
「先生……」
脱ぎ終えても、勃起に気付いても、先生は何も言わずにじっと見つめるだけで動かない。脱ぎすぎたのだろうか。それとも何かしなければいけなかったのだろうか。問うてみようと口を開くと、それより先に首を振られた。
「しゃべるな。そのままじっと立っていなさい」
はい、と返事をすることも、顎を引くことも許されるのかがわからず、無視をしたと思われないといいなと思いながら、距離が離れすぎていてどこを見ているかもわからない視線に耐え続けた。

〜〜〜〜

「離さないでください……先生に縛り付けられたい」
心も体も……そう付け足すと、先生の目がさらに鋭くなった。ぞくぞくして体がぶるりと震える。
「寒いか」
「……いえ」
「それならそのまま、ご飯の支度が終わるまで動かずに立っていなさい」
額への軽いキス。けれどそれだけで、踵を返した。
「……はい」
広いリビングの真ん中。初めてお邪魔した先生の部屋で一人だけ全裸でペニスを起たせている。でも先生はスーツのジャケットを脱ぎ、シャツを腕まくりしただけの状態でキッチンに立っている。そんな現状を頭の中で認識し直すだけで、体の芯から熱が高まっていく。
「はぁっ……」
つい興奮が高まりすぎて目を閉じてしまった。けれどその瞬間、「柊」と鋭い声で呼ばれる。
「はい」

「目は閉じるな。まばたきはかまわないが、動くなと言ったはずだよ」
「すみません」
まぶたを上げ、キッチンに立つ先生を見る。いったい何を作っているのだろう。先生の意識はもう料理に向いているというのに、柊は先生に裸を見てもらえるのを待っている。
裸で立っているだけ、というのがこんなにもいやらしいことだとは知らなかった。見方によっては放置されているのと同じなのに、きちんとプレイとして成り立っている。
「柊」
トントントントンという包丁の音が止んだ。
「はい」
「ペニスの状態は？」
「起っています」
「勃起と言いなさい」
「っ……ぼ、勃起しています」
声が震えた。だってそんな報告をさせられるなんて想像もしていなかった。毎日のように先生を思い出して射精していたというのに、いろんなことを考えたのに、こんなのは一度も思いつかなかった。
「じゃあ料理が終わるまで勃起を維持しなさい」
「……っ、はいっ……」
何を作っているのかが気になった。例えば親子丼なら、それほど時間はかからず作り終えるだろう。けれどもしこれが煮込み料理とかハンバーグだったら一時間近くペニスを起たせたままでいなければならないことになる。
終わりが見えない。それがまた苦しくて、でもとてもいやらしくて。
ここから先生の手元は見えない。水道の音、野菜を切る音、ガスコンロに点火する音。それらは聞こえるけれど、それだけではいったい何を作っているのかまで判断することはできない。
なんだろう――野菜炒めとか？　そもそも先生は料理ができるのだろうか。もし得意なら時間のかかる凝った料理をするかもしれない。その間ペニスを起たせたままでいるなんて。
はぁ……と熱いため息が漏れた。ペニスを弄りたい。見てもらえなくてもいいからペニスを扱き、射精してしまいた――
「柊」
「あ……」
「体が揺れてる。動くなと言ったはずだよ」
「すみません……」
「教育実習で疲れたか」
「いえ、大丈夫です」
「それならどうして揺れてる？　言うことが聞けないのか」
「いえ、すみません……つらくて」

「何が」
「興奮してしまって……」
隠さずに言うと先生がふっと笑った。
「そうだよ。興奮してペニスを勃起させて、苦しいまま立っているように命じたんだ」
「っ、はい……」
意図はわからないけれど、先生がそれを求めるのなら柊はただそれを叶えるだけだ。どんなに射精欲が高まって苦しくても。
「あと五分でできる。今日は初日だからこれくらいにするが、慣れてきたら一時間でも立たせるよ」
「はいッ」
声が上ずってしまった。だっていやらしすぎる。一時間も裸で先生を待つなんて。
「柊は――」
「はい」
「――いや、なんでもない。食事を終えたら風呂だ。その邪魔な陰毛をすべて剃り落としてやらないとな」
「あ……」
「カミソリで剃るよ。怖いか」
「いえ……」
先生がしてくれるなら怖いはずがない。でもはしたなくカウパーをこぼしてしまう気がして、そしてそんな淫乱は嫌いだと言われてしまうのは怖かった。
「よかった。毛があるとよく見えないからな」

〜〜〜〜

「――教育実習中はずっとここにいろ。その間に準備をする。最終判断は実習最終日だ。夜、ここで俺に授業をしてもらう」
「授業……え、化学の、ですか？」
「化学、というより理科の実験かな。内容は最終日に伝えるよ。それまでに、その実験ができるような体にする」
「……はい」
よくわからなかった。けれど先生が決めたことだから。それに直前に知らされる、という方が興奮する。いったいどんなことをするのか……想像するだけで胸が膨らむ。
「まず、二週間で尿道を育てる。その奥に前立腺があることは知ってるか？」
前立腺。聞いたことはあった。アナルから刺激すると気持ちいいと言われているところ。それ専用の玩具が売られているのをネットショップで見た覚えがある。
「慣れればペニスを擦るより前立腺の方が気持ちよくなる」
返事をしようとしたとき、先生がじっと見ていることに気が付いた。まだ続きがあると判

断し、動かずに待つ。
「――だが、俺はそこはしない」
「え……」
「まったくしないわけじゃない。ただ少なくとも、最終判断をするまではしない」
「……わかりました」
ドキドキした。だってペニスより気持ちよくなれるところがあると言っておきながら、そこはいじらないと宣言されたのだ。快感がほしいのに――目の前に置かれた餌に手を伸ばした瞬間、取り上げられた気分。先生のいじわるに感じてしまう。
「ん、っ……はぁ……」
ペニスが苦しい。いじりたい。いじってほしい。
「……まずは尿道を広げるだけだ。器具を入れてゆっくりと拡張していく」
「はいっ……」
今すぐしてほしい。痛くても何でもいいから、ペニスに先生の存在を教えてほしい。
「二週間で五ミリのものを楽に咥えられるようにする」
「五ミリ……」
それが太いのかどうか、自分では判断がつかなかった。人差し指と親指でそれくらいの幅を作ってみるけれど、実感は湧かない。
その様子を見ていた先生が立ち上がった。隣の部屋に入り、何やら重厚な黒いケースを持って戻ってくる。
「尿道ブジーだ。三ミリから十ミリ」
「十ミリ……」
広げられたケースに鎮座していたのはステンレスが光る九本の棒。ゆるい波線を描いたそれはとてもきれいに輝いて見えた。
「十ミリが気になるのか」先生がくつくつと笑う。
「すみません……」
「持ってごらん。いつかは柊の中に入るものだ」
「あ……」
手を伸ばしかけたとき、これは誰かに使ったものなのだろうか、ということが気になってしまった。だって昨日今日買ったものではないだろう。
「どうした？」
「……これ、誰かに使いましたか」
「新品だよ。一度使ったものは、相手との縁が切れたらすべて捨てる」
「じゃあ……」
それなら、と手を伸ばし、一番太いものを抜いた。ずっしりと重みがあって、太さ以前にこの重さをペニスで支えるのは厳しいような気がした。
「そのくらいの重みになると、先端を挿入すればあとは自重で入っていく。柊のペニスがそれを自ら呑み込んでいくところを早く見たい」

「ぁっ……」
先生の視線が股間に向けられていた。その熱で、起ちっぱなしのペニスからカウパーが垂れた。慌ててティッシュを探そうとすると、それに気付いた先生が人差し指でそれを拭う。
「ぁっ……」
「舐めなさい」
「……はい」
自分のものなんて舐めたくない。でも先生の命令だし、何よりそれは先生の指だ。口を開け、大きな手を掴んで人差し指を口に含む。唾液をたっぷり絡め、目を閉じて初めての先生の指を味わう。
「ン……」
それはとてもおいしかった。カウパーの味は大量の唾液とともに飲み込んだので、今感じているのは先生の指先の味だけ。夢中になって舐めしゃぶると、指腹が舌に擦れるだけでビリビリするような快感を覚えた。
「まるでフェラチオだな」
先生に笑われ、パッと指を離す。
「すみませんっ！」
「お前は謝りすぎだ。だめだと思ったらそう言うか、もしくは指を引き抜いてる」
「……じゃあもう一度舐めさせてください」
先生は頷き、柊のペニスからカウパーを掬い取った。口に含み、まずはカウパーを唾液とともに嚥下する。それから先生の指を舌先でくすぐるようにして、味がわかるよう思い切り吸い、今度は舌でこするようにして念入りに舐める。
先生の視線を感じる。熱い。体が熱くてペニスは一向に萎える気配がない。苦しい。今度はきちんと刺激とともに射精したい。
「柊、ストップ」
初めて言葉に慌てて指を口から引き抜く。
「はい」
「ほら、おかわりだ」
とめどなく溢れ続けるカウパーが掬われ、三度目を口に含む。同じように味わっていると、次第に物足りなくなってきた。
「……先生の、舐めたいです」
「今舐めてる」
「指じゃなくて……」
「指じゃなくて？」
何と言えばいいのだろう。先生はペニスと言うけれど、そんな大人の言葉は使ったことがない。
「――おちんちん」
「柊、違う。俺はずっとなんて言っていた？」

「ぺ……ぺニス……」
「そうだ。これからは柊も男性器のことはペニスと言いなさい」
熱いため息が漏れた。だってすごく大人だ。ペニスも、男性器も。
「は、い……っは、」
「ペニスと言うだけでそんなに興奮するのか」
「はいっ……だってすごく大人で、なんだかすごくいやらしいです……」
「そうだな。柊が言うと、子どもが懸命に大人になろうとしているみたいでかわいいよ」
そのギャップを楽しむためにペニスと呼ばせようとしているのだろうか。そんな子ども扱いが恥ずかしくて嬉しくて、ドキドキする。だってこれまで一度も使ったことのない単語だ。
「先生っ……先生のペニス、舐めさせてください」
もう我慢できなかった。指ではなく、先生のペニスを舐めたい。口いっぱいに頬張りたい。
「それはかまわないが、一つ先に言っておくと俺は奉仕させたい系のSじゃない。相手の体をいじめたい系のSだよ」
「ぁ……」
それは少し残念だった。奉仕させられたいし、体もいじめられたかったから。貞操帯をつけた体を散々いじめ抜かれて射精したくてたまらないのに、硬く勃起した先生のペニスをしゃぶるように命じられて、自分ができない射精を先生に促して「羨ましい」「僕も気持ちよくなりたい」と苦しみながら先生の精液を飲みたかった。
「柊は奉仕もしたいのか」
「はい。寸止めされた状態で、『ペニスを舐めなさい』と言われて舐めたいです」
頭の中ではそんな上品には考えていないというのに、先生に話しかける言葉だと思う自然と改まってしまう。
「わかった。じゃあ舐めなさい」
先生がズボンのゴムをずらした。ぽろんと大きなものが飛び出す。
「ぁっ……」
一目見るだけでいやらしい気分になる。他人の勃起なんて、見るのは初めてなのに。
「上手にできたらご褒美をあげよう」
「ご褒美……」
何がもらえるのだろう。あれもこれもといやらしいシーンが頭の中に浮かび上がる。
「だがその前に……セーフワードは何にするか決まったか」
すっかり忘れていた。さっきまでは必死に考えていたけれど、これと思うものが一つも思い当たらなかったのだ。
「いりません」
「柊」
「あったってどうせ僕は使いませんから」

〜〜〜〜

「だがその前に――一度出しなさい」
「え？」
「これに」
「あ……」
差し出されたのは試験管。けれどどうして自宅にあるのだろう。
「実験の練習だよ」
「あ……はい」
実験。先生にMとして認めてもらえるかの確認だ。そのときまでに、少しでも慣れておかなくては。
むき出しのペニスを扱き、先端に試験管をあてる。
「はぁっ、ん、は……」
「人前でオナニーして恥ずかしくないのか」
「いえっ……僕は先生のだから……」
だから自分の意思や感情なんて関係がない。先生のだから、言われたとおりにしたい。
「真性のMだな」
「ン……はぁっ……先生、出ちゃうっ……」
だって一週間も出していなかった。それに大好きな先生に見られていると思えば、簡単に限界はやってくる。
「こぼさず出しなさい」
「はいっ……！」
以前より広がったように見える尿道口にしっかりと試験管を押し当てる。丸い痕がついたらいいなと思いながら押し込むと、半ばその刺激によって射精のトリガーが引かれた形になり、精液が飛んだ。
「あああっ！」
あまりの快感の強さに、手に力が入ってしまった。そのせいでずれてしまいそうになる試験管を必死に維持する。
「っは、あ、ン……はぁ……」
「早漏だな」
「はい……」
いつもこうだ。これまでも先生のことを想像するとすぐに勃起し、吐き出した。
「見せて」
「はい」
試験管に溜まった精液。真っ白なそれを先生に見てもらえるなんて。
「今日は全部だ」
「え？」
先生が試験管を傾け、手のひらに作ったくぼみにそれを流した。

「舐めなさい」
「……はい」
精液はカウパーとは比較にならないほど濃厚だ。顔を近付けただけで、嫌な臭いが鼻をつく。けれど先生の命令だ。それにこれは先生の手。
四つん這いになって顔を近付け、舌を出す。ぺろりと舐めてみるとえぐみが強くて、思わず顔をしかめた。
「これが俺のでもそういう顔をするのか」
「っ……！」
思わず目を見開いた。だってそんなことはありえない。
「しっかり味わって舐めなさい」
「はい……」
頭の中で、これは先生の精液だと言い聞かす。でも自分のMな部分が「これは自分の」と主張してくる。
「そうだ。しっかり舐めなさい。俺の手のしわの隙間まで、舌を尖らせて……そう、上手だ」
ぺろぺろと舐め、嫌悪感からかやけに出てくる唾液とともに飲み込んでいく。しばらくそうしているとほとんどの精液がなくなり、あとは先生の手を舐め清めるだけになった。
「くすぐったいな。だがとてもかわいいよ」
（あ……）
山吹の言っていたかわいいという言葉が思い起こされた。音は同じなのに響きはまったく違う。喜びは比較にならないほど違う。
「きれいになったら俺の手を鼻で押し返しなさい」
言われたとおりにすると、汚れのない左手で頭を撫でられた。髪の毛をわしゃわしゃされて、それでようやく犬扱いだったのだと気付く。
「じゃあ次は尿道だ。足を開いてこちらにペニスを向けなさい」
「はい」
膝を立て、足を開く。ペニスはまた起ち上がっているし、性器がついている部分からしても見せるために足を開く必要はないのだけれど、この方がいやらしいから。それに先生への服従心を示すことができる。
「たった一ミリしか変わらないと思うかもしれないけど、尿道の五ミリはかなり太いよ」
「はい」
先生の手元をじっと見つめる。たしかにこれまでのとは存在感が違った。滑らかな曲線、光沢のある漆黒が凶器に見えてくる。
「さあ、入れるよ」
いつもどおりの準備を終えた先生の手が、ブジーを尿道口に添えた。尿道口の付近、最初のところは痛みもなかった。けれどそれが内部に侵入を始めると、尿道が割れるような痛みを覚えた。
「っ……！」

「痛いな」
「っ……はいっ……」
手を握り、痛みに耐える。気を抜くと目を閉じてしまいそうになるけれど、必死に開け、ペニスにブジーが挿されていくのを見守る。
「っは、ん、ぁっ……くぅ……」
「おしっこのときの痛みはこれまでの比じゃないよ」
「っ、はいっ……！」
わかっている。だって挿入だけでこんなにも痛いのだ。けれどここで痛いなんて言葉は口にできない。
「深呼吸しなさい」
「はいっ……」
スーハーと音がするほど深く息をする。けれど痛みは少しも楽にならない。体温が上がり、脇に汗をかく。
「うぅっ……っは、」
今感じている痛みと、今夜以降待ち受けている痛みを思うと心が折れそうになった。けれど先生が入れてくれるものは何だって受け入れたい。
「ほら……もう入るよ」
「あ……」
ゆっくりだったけれど、先生の手は決して止まることがなかった。太いそれが、持ち手の部分まで入り終える。
「きれいだ。痛みに耐えるペニスはとてもかわいい」
「かわいい、ですか……？」
「ああ。痛みで萎えているだろう？　なのに芯が通っているからふにゃふにゃにならない」
先生がペニスをそっと撫でた。そういえば、萎えたペニスに触れられるのは初めてのような気がする。いや、排尿のときに触られたことがあったっけ。
「そのうち起たなくさせたい」
「え……？」
「アナルでの快感に慣れると、ペニスは次第に起たなくなるよ。体が、男としてペニスを刺激されるより受け入れる方がいいと判断するんだ。そうなったらかわいいと思わないか」
「かわいい、ですか」
「ああ。セックスをしている最中だって柔らかいペニスがぶるんぶるんと揺れるんだ。なのにちゃんと柊自身は感じてる。それがいやらしくてかわいいと思う」
先生がそう思うならそうなるようにしてほしい。起たなくなっても射精ができるのか、というのは気になったけれど、これまで何度も射精を禁止されることを想像して抜いたのだ。だから考えようによっては夢が現実になるということだ。
「……どうやったらそうなれますか？」
「時間がかかるよ。アナルを丁寧に育てて、前立腺の刺激が一番気持ちいいと体に教え込む」

「はい」
期待で、ペニスの痛みを一瞬忘れた。けれどその期待のせいで徐々にペニスが熱を持ち始め、痛みがぶり返した。
「……勃起を忘れさせるという話をしながら勃起させたな」
「すみません……」
「いいよ。これからあと何回勃起できるか……今夜から貞操帯をつけるから、自分で数えてごらん」
「あ……貞操帯……？」
「そう。注文しておいたのがようやく届いたんだ」
先生がベッドから降りた。リビングから、帰りにコンビニで受け取っていた小さな箱を持って戻ってくる。
「これでしばらく勃起を封じるよ」
「……はい」
見せられたのは小さな貞操帯だった。あまりにも小さくて、サイズを間違えているのではと思うほど。だってペニスを入れるはずの部分は、柊の親指よりも短い。
「これでペニスを潰すようにして片付ける。つけたままでは排泄もできないから、トイレに行きたいときはその都度俺に声を掛けなさい」
「学校では……？」
「同じだよ。ほとんど職員室で過ごすことはないし、大丈夫だろう」
「はい」
一日中貞操帯で先生を意識しながら過ごせるなんて。学校ではいやらしい気分にならないように気を付けないといけないけれど、そうなったところでペニスは起たない。楽しみだ。
先生は愛おしげにそれをひと撫ですると、隣に置いた。それから、なぜかもう一つ小さな箱が取り出される。
「ローター、ですか」
そちらは一般的なものだった。小さな楕円形から伸びたコードの先にスイッチがあるもの。
「そう。貞操帯をつける前にこれでペニスを中から揺らしてやろうと思って」
「っ……」
先生がスイッチを入れた。ウィィィと振動音が鳴り始める。普通に使われるのなら期待しかしないのに、今はそれが拷問を与える器具にしか見えない。
「ほら、痛いところを揺さぶられるよ」
「あ……あ……っ」
昨日までだったらきっと快感として受け入れただろう。しかし今はだめだ。勃起をしているのは貞操帯への期待からで、尿道から得られる快感のせいではない。
「ほら……」
「あああああああああああああ！」
小刻みに震えるローターを、ペニスから飛び出した持ち手部分に当てられた。痛む尿道が

細かな振動で揺らされる。

〜〜〜〜

「二週間、よく頑張ったな」

それは、教育実習を、だろうか。それとも――。

「服を脱ぎなさい」

「はい」

缶ビールをテーブルに置いて立ち上がる。ソファに座ったままの先生に向き直り、一枚ずつ脱いでいく。その間、先生は一言も発しなかった。ただじっと、見えていく肌を見つめるだけ。

全裸になると、いつもどおり尿道ブジーが用意された。

「お願いします」

挨拶をして、腰を突き出すようにしてペニスを差し出す。

「もう六ミリが入りそうだな。優秀だ」

貞操帯が外された。自由になった途端、ペニスはむくむくと膨れ始める。

「ありがとうございます」

尿道をスムーズに広げられたのは、先生がしてくれたからだ。だからこそ痛みにだって耐えられたし、毎日の尿道責めを心待ちにすることができた。

「……入った」

「ありがとうございます」

勃起の先に見える持ち手部分。十センチ以上あったものがすべてペニスの中に納まったのだと思うと、いまだに不思議な感じがする。

「じゃあこれ、今日の授業計画。実験内容だな」

「はい。ありがとうございます」

渡された一枚のプリント。そこには先生らしくわかりやすい言葉が並んでいた。

目的――カウパーに精子が含まれることがあるというが、それが事実か検証する。

道具――温度計、シャーレ、顕微鏡、こまごめピペット、ビーカー、生理食塩水、シリンジ、桶など。他に必要なものがあれば追加可。

方法――尿道内を洗浄し、カウパーを顕微鏡で観察する。

（すごいえっち……）

けれどまさに実験だ。本当にカウパーに精子が含まれているか、なんて興味を持つのは中学生くらいなのに。

「器具は揃ってる。他に必要なものがあれば、家にあるものは適宜使ってかまわない」

「ありがとうございます」

どうやら自宅には実験器具一式が揃えられているらしい。連れられて書斎に入ると、テーブルには見慣れた器具が並んでいた。奥の壁際にはパソコンデスク。椅子がないのは、ダイニングに移動しているからだろう。左手側の備え付けの棚には化学に限らず理科全般に使うような実験器具が整然と並べられていた。

「じゃあ……授業を始めます」

黒板やホワイトボードはない。渡された紙の内容を頭に入れ、二メートル先の床に座る先生に口頭で説明を始める。

「今日は僕のカウパーに精子が含まれているか、を観察してもらいます」

先生が頷く。相手はたった一人なのに、クラスでの授業よりも緊張した。

「えっと……まずは条件の確認です。尿道内に精子があると正しい結果が出ないので、洗浄をします。それから……体温によって結果が変わることのないよう、温度計で体内の温度を確認してから始めます」

器具の並んだテーブルに腕を伸ばすと、その動きを遮るように先生が言った。

「どちらが先？　洗浄か、体温か」

「あ……洗浄です。洗浄で温度が変わることがあるので」

そう答えると、先生は満足げに頷いた。

間違っていなかったことに安堵しながらペニスを持って先生の方に先端を向ける。

「最初に実験対象を確認してください」

間違いがないか――間違えるはずもないけれど。先生は人差し指と親指でペニスを挟み、角度を変えながら全体を観察した。

「うん、これでいい」

「では、中の洗浄から始めてください」

ドキドキした。尿道にブジーを受け入れることは慣れたけれど、洗浄なんてされたことがない。

先生はテーブルの上にあった「生理食塩水」と書かれた袋を手に取ると、シリンジでそれを吸い取った。

「はぁ……」

「柊先生、興奮してるね」

「は、はいっ……」

だってこんなにいやらしい実験をすることになるなんて想像もしていなかったのだ。

「尿道の洗浄はここから？　それとも空にした膀胱に水を入れて、排泄の要領で？」

「あ……」

そこまで考えていなかった。テーブルの上には大きな桶があったので、洗浄した際の水分もすべてそこに流すのだろうと悟る。

「どちらでもかまいません。もし洗浄方法によって結果が変わると思えば、それはまた次回確認してください」

先生はどうするのだろう。どちらを選ぶ方がいやらしいのだろう。

「……惜しいな」
「え？」
「さっき、どうして先にビールを飲ませたと思う？」
「あ……おしっこ、するため……？」
「そうだ。尿道をいじったあとは毎回排尿させただろう？　まあ今回は尿意を我慢させる目的もあったが……だから今回は膀胱までは入れず、尿道に直接水を注入して洗うよ」
「はい……」
痛いくらいに硬くなったペニスを先生が持った。しかし、そこにはまだブジーが刺さったまま。
「あ、えっと……」
「これは実験には関係ないな？」
「はい……」
「趣味のものは片付けておいてくれないと」
先生がにやりと笑った。わざわざこうして辱めるために入れたのだとわかり、お腹の奥がドクドクと脈を打つ。
「すみません」
尿道ブジーに触れるのは初めてだ。あの快感を自分で与えることになるのか、と考えながらゆっくりと引き抜く。
「あ、ああっ……」
気持ちよくて、抜きたくない。もう一度中に押し込んで、何度も何度も出し入れしたい。けれど先生を待たせてるし、今は実験の授業中だ。
「ン……はぁんっ！」
まるで離したくないと言っているように、尿道の粘膜はブジーを咥え込んでいた。それをずるっと引き抜くと、早く返せと尿道口がひくつく。
「ぁ……ぬ、抜けました……使ってください」
ブジーは先生が引き取ってくれた。洗浄もしていない濡れたそれが、テーブルの上に直に置かれる。
「よし、じゃあ洗浄しよう」
「はいっ……！」
先端に添えられたシリンジから、冷たい水が注がれた。勃起がわずかに萎え、けれどすぐに体温に馴染んでまた膨らみ始める。
「洗浄水はどこへ？」
「あ……ここへ」
そのために用意してくれたのだろうに。テーブルから桶を取り、ペニスの下に置く。
「あっ、あっ、あっ！」
お腹の奥の方まで液体が入ってきているのを感じる。もうそれ以上入れられたらどうなってしまうのか――わからないけれど、ドキドキする。

「はぁっ、あっ、あっ！」
「これくらいかな。出していいよ」
「はいっ！」
ペニスが解放された。排尿するときのように手で支え、下を向けて水を出す。
「ぁ……出てる……」
それはぼたぼたと流れ落ちるだけだった。感じていたほどたくさんは入っていなかったからだろうか。それとも膀胱括約筋の力を使っていないからだろうか。入れられた水分が垂れ流され、最後に雫をいくつも落とす。
「洗浄は一度？」
「いえ……きれいになったと思うまで何度でもしてください」
出すだけの場所に水分を入れられる快感。そしてそれを、先生の書斎で桶に出すという背徳感。
「じゃあもう一度」
「はい」
許可を求められているようで、実際には違う。だって今、先生は自分の所有物を使って実験をしているだけだ。
冷たい水が、さっきよりも速いスピードで中に入ってきた。
「ぁ……ン……」
気持ちいい。その冷たさがくせになる。
「よし、出して」
「……はい」
せっかく先生に入れてもらったもの。もっと体内に留めておきたいけれど、仕方ない。
しょろしょろと透明の液体が出た。水滴はティッシュで丁寧に拭き、もう一度先生に尿道を向ける。
「続けてください」
「洗浄はもういいだろう。次は検温だったな」
「はい」
テーブルの上で圧倒的な存在感を放っている実験用の温度計。長さが三十センチもあるそれを、先生が握った。
「……この中身は何だった？」
「アルコール、です」
「ちゃんと勉強してるな」教師の顔のほほ笑み。
「高校一年生のとき、初めての実験のときに先生が教えてくれました」
「そうだったか」
この顔は、覚えている。というより、毎年同じ説明をしているのだろう。
「アルコールをアナルに入れたらどうなる？」
「急性アルコール中毒、です……」

「そう。まあこの温度計のアルコールは……それよりも何が危険だ？」
「割れること、です……尿道の中で温度計が割れるとガラスが――」
想像しただけで怖かった。けれどペニスは何をしたって萎えることがない。それよりむしろ、その危険なものを早く入れてほしいとねだっている。
「そう。こんな細いもの、簡単に割れてしまう」
先生が温度計の両端を持った。両親指にぐっと、割るように力を入れてみせる。
「――だから丁寧に扱ってやらないといけない」
手から力が抜けた。大切な器具を故意に割るような人ではないとわかっているけれど、怖くなる。
「はい……」
さすがに尿道内で割れることはないだろう。けれどもし……もしそんなことが起きたらペニスはいったいどうなってしまうのだろう。
「さあ、ペニスを」
「はい……」
ローションをまとった温度計が尿道口に触れた。太い。ブジーよりかなり太く見える。
「さあ、柊先生のお腹の中の温度は何度かな」
楽しそうな声とともに、大きなものがペニスを割るように入ってきた。
「っ、あ、あ、あああああっ！」
やはり太かった。それでも痛みを感じないのは、そこを広げられることに慣れたからだろうか。
「軽いし狭いな……これでは自重では厳しいか」
先生がゆっくりとそれを中に押し込んでいく。
「ああっ、ああっ！」
「ああ、ぐんぐん温度が上がってく。もしかしたら見えないかもしれないと思ったが、ペニスが小さいから挿したままでもちゃんと温度を確認できそうだ」
「ああっ……なん、何度、ですかっ」

〜〜〜〜

「それよりほら、こうやって揉むんだよ。やってみるか」
「ぁ……はい」
先生がいなくても、これからは自分一人でやらなくてはならない。それにピアスも早く開けてほしいし、乳首でイける自慢の体になりたい。
「ぁっ……」
乳首に触れると、そこは熱を持っていた。これまで意識して乳首に触れたことなんてなかったけれど、こんなふうに熱くなったのは初めてだと感覚でわかる。
「つまんで、力を入れて……そう、上手だ。少し痛いくらいがいい」

「んっ」
痛いくらい、と言われても、強くしても感じるのは快感ばかり。それでもきゅっきゅと揉み込むと、次第にペニスがぬるつき始めた。
「せんせぇっ」
「揉むだけじゃなく、たまに乳頭を転がすんだよ。先端に指の腹を当てて優しく円を描くように」
「あっ！　あああっ！」
こう、と言って先生が柊の指を動かした。たったそれだけで、しびれるような快感に襲われる。
「ひあああっん！」
「これが好きか。だからってこればかりではダメだぞ。次はこうして、先端を爪でカリカリしてごらん」
「ああっ！　ああっ！」
ダメ。腰が揺れてしまう。もうイきたい。ペニスを思い切り扱きたい。
「ああああっ！」
もうカウパーは出ているはずなのに。先生がそれに気付いていないはずがないのに。なのに、先生はまるで新しい玩具を見つけた子どものように柊の乳首をこね続ける。
「他にも、こうやって指で乳頭を弾いたり……」
「ああああっ！」
「乳頭から指を離して乳輪を撫でる」
「やあああ！　やあっ！」
気付けば自分の手は床に落ち、痛いくらいに拳を握りしめていた。両乳首を先生に任せ、ぐいぐいと胸を反らせて押し付けるだけ。
「あ、ァッ」
「柊、自分で刺激しなさい」
「やぁっ！」自分じゃうまくできない。先生にしていてほしい。
「こら。これではカウパーの採取ができない」
「っ……」
そうだ、実験に使ってもらっていたんだった。おずおずと手を乳首にやると、先生はまた正面に回り、こまごめピペットをペニスの先端に挿入した。
「ああああっ！」
「ぬるぬるだ。このまま根元まで入るかもな」
「ひぃっ」
そんなの無理に決まっている。だって温度計と違ってどんどん太くなっていくし、そもそものサイズが違う。
「冗談だよ。でもいつか入れられるようにしような」
「あああああっ！」

話しながら、先生が中の水分を吸い取った。ダメなのに、いやらしいのをたくさん吸われてしまっている。
「……思ったより採れないな。これじゃダメだ。柊、四つん這いになりなさい」
「んぅ……」
こんなにぬるぬるになっているのに。やはり見た目や感覚と、実際に採取するのは違うのか。
のそのそと四つん這いになり、指示もされていないのに先生にお尻を向ける。するとどうやら正解だったようで、お尻を撫でながら「いい子だ」と褒められた。
「ペニスの下にシャーレを置いておく。ここにじゅうぶんな量が溜まるまで、ずっと乳首を弄り続けるよ」
「んっ……！」
必死に頷く。だって話している間、乳首が放置されてしまっているのだ。今すぐ乳首をこりこりしてほしい。もうペニスは射精したいと限界を訴えているけれど、そうなっていないとカウパーは出せないから。
「乳首が熱を持ってる。このままだと明日腫れそうだ」
「ぁ……」
「でも別にかまわないだろう？　家にいる分には全裸なんだ。寝るときはタオルケットがこすれるかもしれないが――つらくて寝れないようならばんそうこうを貼ってやるから」
「ぁっ……」
乳首にばんそうこうなんて、想像するだけでいやらしい。でも敏感な場所を守ってもらえると思うと嬉しくなる。
「ほら。大好きな乳首だよ」
「あぁぁんっ！　アッ、ああっ！」
正面であぐらをかいた先生が、腕を伸ばして乳首に触れた。こりこり、くりくり、カリカリ――。気持ちよすぎておかしくなりそう。
「ああっ、せん、せっ」
「ん？」
「先生のっ、ペニ、ああっ！」
しゃぶりたい。先生のペニスを咥えながらカウパーを垂らしたい。
「何だ？」
「ペニスっ、舐めたいっ……！」
指に乳首を押し付けながら、それでも上を向こうとしたせいで背中が痛む。けれど必死な気持ちを伝えたかった。
「ああ」
先生の指が離れた。一気に喪失感が襲ってきたけれど、その手がペニスを取り出したのを見て、意識はすぐにそちらに向いた。
「んむっ！」

思い切りくらいつき、すでに硬くなったそれを味わう。触れてもいなかったのに勃起していたことが嬉しくて、口内だけでなく心の中まで満たされた。
「んぅ、んんっ！」
おいしい。それに乳首が気持ちいい。射精させてもらえないのは苦しいけれど、先生にカウパーの質を確認してほしいから。
「かわいいな。してもらいたいのにしてもらえないことを必死にして」
「んぅ」
すぐには理解できなかった。けれどぼうっとした頭で必死に考え、ペニスへの愛撫のことだと理解する。
「んん……」
「柊はうまそうにしゃぶるな」
「んっ！」
だっておいしいから。そう頷くと、先生が笑う。
「腰を揺らすなよ。せっかくカウパーが出てもシャーレに垂れなかったら意味がない」
そうだった。それではいつまで経っても実験が先に進まない。
それからしばらく、亀頭を味わいながら乳首でだけ性感を得る時間が続いた。しかし徐々に、乳首が痛くなってくる。
「んぅん……」
「そろそろいいか」
先生の手が乳首から離れた。ジンジンと痛むそこが、どうしてやめるのだと訴える。
「ああ、すごいな。射精したのか？」
背後に回った先生が笑った。お尻を突き出したまま頭だけで振り返ると、見せられたシャーレには水たまりができたていた。
「これなら見られる」
先生がこまごめピペットを手に取った。シャーレのカウパーを吸い上げ、スライドガラスに移動させてカバーガラスをかける。その一連の動作はさすが先生なだけあってスムーズだった。そしてその間一度も柊のペニスに意識を向けられなかったことが、まさに実験のために使われただけと言わんばかりで興奮した。
「先生……」
「ん？」
先生の意識は実験に向いていた。顕微鏡にプレパラートをセットし、ピントの調節を始めている。
どうやら姿勢を変えてもいいようだと判断して上体を上げると、放置されたペニスはもう事足りたというのにいまだにカウパーを漏らしていた。
「足りますか」
「ああ」
寂しい。だってせっかくまだこんなにもとめどなく分泌しているというのに。

「ほら」
ペニスには見向きもせずに差し出されたウエットティッシュ。自分で先端を拭き、先生の言葉を待つ。
それをゴミを捨てたとき、先生が顕微鏡から顔を離した。
「今見た分に、精子はなかった」
「ぁ……」
「これをもって、カウパーの中に精子はないと結論づけてもいいか？」
「……いえ……偶然含まれていない部分だった、という可能性があります」
ドキドキした。だってこのあとに訊かれることはもう想像がついている。
「うん、じゃあどうする？」
やっぱり。
「もう一度、僕のカウパーを採取して確認してください……」

7万5千字、冒頭でシリアスと見せかけて、実際には半分以上エロです。
今作ですが……実は普段原稿の誤字脱字等のチェックをしてくださっている方が体調不良につきお休みでして（早く回復されますように……）
私のセルフチェックのみでのアップとなりました。なので、かなりお見苦しいと思います。大変申し訳ございません。誤字脱字等については他作品同様、気付き次第修正し、再アップしていく予定ですので、どうかご容赦いただけますと幸いです。
よろしくお願いいたします。

放課後の実験
gooneone（ごーわんわん）
2021/10/16
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11
ちるちる:gooneone